

友、知人から電話や手紙を頂き、うれしさもひとしお、勇気が湧いてくる。

今年も学校の夏休みには、本州在住の娘一家孫ひ孫七人が、例年通り訪れ一週間余り滞在。生活を共にすること、さらに情も湧き、帰りの折は手を握り合い別れを惜しむ。

さて、振り返ると災害の多い一年であったが、おかげさま冥利<sup>みょうり</sup>、すべてに感謝です。

## 足寄やまなみチーズ街道

酪農家 吉川友 二

夢を生きる

『噴煙』に文章を初めて書いたのは、二〇〇九年の第三十一号である。十八年前の一九九一年に大学を卒業して農業をやるうと決断をした時のことを書いた。ザック一つだけを背負って斜里岳のふもとの農場へ行った。仕

事の合間に河合隼雄氏の『明恵夢を生きる』を読んでいた。この人生の転機に自分も印象に残る夢をいくつか見た。

夢はどんなに悪い夢でも夢を見ている人への応援歌なのだそう。それならば、この現実起こる出来事も自分への応援歌と言えるのではないだろうか。

『噴煙』を書くことが応援歌の記録になり、書くという行為自体が応援歌だった。

十年の農業の修業期間を終えて、二〇〇〇年に足寄で就農をした。何千万という借金をした。それまでは見向きもなかった経営者の書いた本を読むようになった。

初めての文章が載った八年前の『噴煙』の巻頭言に「オバマ新大統領が就任し、どのような手腕でこの難局を乗り越えるのか注目されて居ります。」とある。

二〇一七年の今年ドナルド・トランプ氏が大統領に就任した。今回の新大統領が特別なのは、彼が世界の問題を解決することを期待されているのではなく、彼自身が問題を起こすのではないかと懸念されていることだ。

当時読んだ本の中にトランプ氏もいた。不動産で成功した話や、自分で制作して出演しているテレビ番組の話が書いてあった。将来は大統領になりたいと書いていた。

トランプ氏はユング（スイス生まれの心理学）の自伝が愛読書であると書いていた。しかしこの軽薄な本の著

者が、自分の無意識の世界をとことんまで追求したユングの自伝を読んだはずがない。これは絶対にはつたりだと思った。しかしこの本が愛読書であると言ったら、軽薄に見える彼にとつてこれほど効果的なのはつたりはない。トランプ氏が大統領選に立候補したことを聞いた時には、同姓同名の別人かと思った。この本を書いた人物が大統領になるなんて考えられなかったからだ。しかし大方の予想を裏切つて大統領にまでなつてしまった。彼の夢を実現する能力はものすごい。そして彼のその大統領になりたいという動機はどこから生まれてくるのだろうか。

トランプ氏が大統領候補になつたと知つて『ユング自伝 思い出・夢・思想』をまた読み始めた。トランプ氏の自伝はまた読もうとは思わなかつた。

以前は英語のペーパーバック版で読んで数十ページで挫折した。今度は電子書籍版を英語で読み始めた。電子書籍は、分からない単語を指で押していると意味が出てくる。

なぜか英語で読みたくなる。なぜこんな無駄な努力をしているのか分からなくなる時。例えば年を取つてから始めた、スケートやクロスカントリースキー・自転車など。そんなときは生まれ変わった時の自分のために努力をしているのだと考えている。

ユング氏は子供のときに見た夢をまず書いている。そ

の夢の内容に圧倒される。彼にとつては外に起きた出来事よりも、心の中で起きたことの方が重要なのだ。読んでいると彼の心のエネルギーでこちらの心が揺さぶられるのを感じる。ユング氏がお墓から出てきてすぐ隣で語つてくれているようだ。こんな読書は久しぶりだ。

私は物心がついた頃から人見知りだつた。音痴であることは小学生で自覚し、口下手であることは中学生の時に自覚した。青春時代は言葉というものは、しゃべればしゃべるほど自分の思いを人に誤解されるものだと思つていた。

大学生の時に一緒に山登りをしていた仲間の一人が「言葉は武器だ。言葉によつて人を思い通りにすることができる。」と言つたのには驚いた。同じ「言葉」であるが、人によつて全く反対に受け取られるのだ。人ほんなにも違うものだと実感した。ちなみにその友人は子供の時には生徒会長をやつていたそうだ。

私の友だちが小トランプ氏だとしたら、自分は小ユング氏だ。正反対の性格ではあるが、今でも彼とは連絡を取っている。トランプ氏もユング氏と心を通じ合わせているのだろうか。でもトランプ氏に会つて聞いても「これははつたりですよ」と正直に答えてくれるような人ではなさそうだ。

## 文化を生きる

一人の青年が私の牧場（ありがとう牧場）の牛乳を使ってチーズを作らせてくれとやってきた。十年前の話である。朝の搾乳をしている間にカセットコンロに鍋を乗せてチーズを作って帰った。

本間幸雄（さちお）君である。高校生の時にテレビでチーズ職人を見てから、チーズ職人を目指してきた男だ。二〇一三年に彼と共に「ありがとう牧場 しあわせチーズ工房」を起業した。そして昨年は「しあわせチーズ工房」として独立を果たした。

酪農を志す若者の他にも、チーズを作りたいという若者が私の牧場を訪ねてくる。現在実習をしている若者三人は皆チーズを作って将来暮らしたいという夢を持っている。足寄町の山の中にはそんな若者が集まっている。

足寄の山の中にチーズ工房が点々とできる。足寄町へ行けば美味しいチーズが食べられる。それを目当てに観光客がやってくる。足寄がチーズを愛する人の憧れの地になればよい。そんな夢を思い描いている。

ヨーロッパへ旅をした事のある大先輩の酪農家が、足寄の山の放牧風景はアルプスのふもとの放牧風景とそっくりだと、「足寄アルプス」と名付けてくれた。農協の「足寄チーズ工房」と「しあわせチーズ工房」「ありがとう牧場」のチーズ工房とすでに三つあるのでそれを結ん

で、「足寄やまなみチーズ街道」と私はそう呼んでいる。

## 文化とは何なのだろうか？

「これからは、荒々しい開拓はなくなつて内的建設の期に入るのであるから、文化の焔（ほむら）をより高く掲げてほしいものである。記念誌はその申し送り書でもある。」足寄開拓三十年の記録『硬骨の賦』（昭和五十三年発行）に当時の開拓農協の組合長が書いた文章である。文化とは何だろうかと考え始めたのは、これを読んだのがきっかけであろうか。

道外出身の私が文化と言つてまず思い浮かべるのは十勝のスケートである。寒い夜にお父さん先生たちが校庭にスケートリンクを造る。自分のしてもらったことを子供たちに返してあげる、そんな思いからだろうか。

足寄といえば、ラワンぶぎやオンネトーが思い浮かぶ。オンネトーは自然なので文化と呼べるのだろうか？その土地固有の自然・風土はそこに住む人のところに影響をあたえている。自然・風土は文化を作り出す基になるところをつくっている。

逆に文化ではないものは何だろうか。コンビニである。自転車で日本一周の旅を始めて五年になる。旅先でコンビニを見ると何とかならないのかなと思う。旅の時間が日常の時間に引き戻されてしまうからだ。しかし自転車

の旅ではコンビニに一番お世話になっている。そしてコンビニの便利さは自分の住む町にはなくてはならないものになっている。便利さを追求すると土地に根差した固有の文化や伝統は不要になってしまう。文化とは便利さではない。

今年の自転車日本一周の旅は大阪のユニバーサルスタジオ ジャパンを出発して松山道後温泉までを三泊四日で走った。「しまなみ海道」を走るのが一つの目的だった。しまなみ海道とは、広島県の尾道から瀬戸内海の島々を渡って四国の今治までを結ぶ道である。サイクリストの憧れの地となっている。

旅で訪れる尾道を舞台にした大林信彦監督の映画を旅に行く前に見たら旅が盛り上がるだろうと思った。高校を卒業して浪人していた時、深夜にたまたまつけたテレビの画面に釘付けになった映画がある。尾道を舞台にした『転校生』である。

大林監督が尾道を舞台にして映画を撮影したのは「ふるさとが壊されることを守るための戦いだった」そうだ。映画の上映後、ロケ地めぐりのファンがやってきて尾道はすっかり観光地になっている。

余談になるが、私のふるさととは昨年NHKの大河ドラマ『真田丸』で有名になった上田市である。戦国時代に

城下町が造られたときからの町名である鷹匠町・馬場町（ばばんちょう）・鍛冶町など多くの地名が昭和四十四年に消された。東京ガスが検針に不便だからと自治省に働きかけ、全国で行われたらしい。地名は地域の歴史、伝統、文化そのものだ。『真田丸』を機会に上田市の町名復活運動は成功したのだろうか？

レンタル店では大林監督の『転校生』がなかった。かわりに同じ監督の自転車レースの写真のあった『風の歌が聴きたい』という映画を借りてきて見た。耳の聞こえない若い男女が主人公の映画であった。

それには付録映像がついていて、監督が手話について語っていた。手話は方言がとて豊かであるそうだ。それはお国自慢が手話の表現の中に取り入れられているからだそうだ。文化とは簡単に言うとお国自慢であると言った。それを聞いて、「そっか……文化とお国自慢なんだ」と長年の胸のつかえがとれた。

昨年、愛媛を自転車で行っていた時のこと。沢の両側の切り立った斜面にミカン畑があった。転んだら下まで転げ落ちそうな傾斜である。そのミカン畑を見てショックを受けた。日本の農業やTPPはこれを見ずして語れないと思った。

バス停でバスを待っている朝の通学の子供たちにはようと声をかけながら、この子供たちがこのミカン畑を

継いでくれるのだろうかと思った。継いでくれるとしたら、「文化」を守ろうという気持ちではないかと思った。経済だけで考えたら、ここでミカン畑を継ぐ若者はいないだろう。

私の師匠の齋藤晶さんを昨年春に訪ねた。戦後開拓で旭川市の山の中に入植した方だ。途方もない努力の末に原野を開拓して畑作を試みたが、野ネズミたちに食い荒らされて収穫ができない。山の中で生き残るために蹄耕法（ていこうほう）を独自に発見して山を牧場に作り変えてしまった人だ。蹄耕法とは牛を野山に放牧することによって耕起しなくても牧草地ができるという農法のことである。

晶さんは牧場を訪ねてきた人誰にでも、自然の素晴らしさを語ってくれていた。しかし今回訪ねると晶さんはベッドに寝たきりであった。あの情熱的な晶さんが寝たきりであったのもショックであったが、人手不足から牧場の三分の一が荒廃していたのもショックであった。

ヨーロッパのふもとの酪農ではどうだろうか。一人の酪農家が仕事をできなくなったからといってアルプスの放牧地が荒廃するようなことが起こるだろうか。足寄町でも年に約三戸の酪農家が、北海道では二百戸の酪農家が離農をする。その多くは後継ぎがないため

だ。北海道の酪農の歴史は百年足らずである。酪農の文化をこれから育てていかなければならない。

どうしたら文化は生まれ、育まれるのであろうか？

仕事をしていたふと足を止めると、足元の自然は美しい。空を見上げると天体の絶妙なバランスに励まされる。山の上から見下ろした時のタラノ木々の淡い黄色の花の幾何学模様。植物も、動物も、鉱物もなぜ自然は美しいのか？そしてなぜ人はそれを美しいと感じることが出来るのか？

「美しいと感じるのは、人間の脳も自然を作り出しているのと同じ宇宙のエネルギーで出来ているからだ」と去年ラジオで聞いて膝を叩いた。美しいという感情は自然と人間のエネルギーが共振する時に生まれる感情なのだ。詩人のリルケは宇宙が人間を創り出したのは、自然を見て感動する存在が欲しかったからだと言ったらしい。転勤で足寄に一時的に住んでいる人が、足寄町を魅力のある町にしたい、人口を増やしたいという話をしていた。「住めば都」という言葉があるが、人間には自分の住んだ所を都に変えたいという本能があるらしい。

どこでも同じコンビニでさえ、店員さんの個性がそのお店の独自性を生み出している。旅行雑誌を読んでいるとパワースポットという言葉が出てくる。自然や神社などのエネルギーのあふれるところで、行けば幸せになる、



癒されるという場所のことである。このコンビニはパワースポットだわ、というような店員さんと出会うことがある文化を生み出し育むには、われわれが宇宙のエネルギーと共振するような生き方をすればよい。宇宙のエネルギーは自分の内側にも外側にもある。自分自身がパワースポットになればいい。

自分の心を満たしてくれる農業、そして同時に人の幸せのことも考えた農業をすること。自分の心の声を聴いて知恵を出し行動する。そんな一人一人の農業の営みが集まれば、おのずと文化が生まれて育つのだろう。

## ハルニレ

酪農家 北野明起

大きなニレの木とカツラの木があるこの場所で、私たちが就農したいと思ったのは、七年前の冬のことだ。

二〇一〇年三月末、岡山の蒜山から足寄への引越しは、自家用車とフェリーを利用した。舞鶴発の新日本海フェリー、出発の日は、大荒れの天気だった。何とか出発したものの、船はひどく揺れた。売店はすべて閉店。夫婦そろって船酔い。もうすぐ二歳になる娘だけは、どんなに揺れても毎食、同じ弁当を元気にモリモリ食べてくれたのが、何よりの救いだった。娘と猫一匹を連れて、

大雪の中、小樽の宿についたのは、夜中の一時を回っていた。

翌日は、芽登の新規就農センターに一泊し、引越し先に荷物が到着するころには、初対面の人を含め、大勢の方が手伝いに来て下さり、足寄での生活がスタートした。

### 就農

二〇一二年

一月 紘平は、芽登のS牧場で実習中。日中の空き時間に、牛舎の片付けを始めた。寒い。ゴミの分別、薪運び、それは二月も続いた。初めての作業、まだ生後十か月だった息子には、寒くて可哀そうな思いもさせたいと思うが、終わりの見えない外での作業も、一日の中心で大切な充実した時間だった。

三月 当時で築三十九年の住宅の片付けと修理も同時進行で始まり、紘平は、S牧場での実習を終えた。

四月 就農先へ引越し（娘四歳、息子一歳）。住宅のお風呂は、改修工事中だったので、二日に一度、温泉へ行ったり、仲間の家でお風呂を頂いたりした。二十一年間、牛が入っていない牛舎は、改修工事をするにしようとしたが、資金がいつ下りるか分からず、すぐに着工はできなかった。

五月 先行きが見えない中、十勝市場で、育成牛（四〜五か月齢）五頭を、自己資金で購入。仲間二人が心配